

上田秋成文献目録について

2016年1月14日

木越 治

1. この目録は、横山邦治監修『読本研究文献目録』（溪水社 1993年10月）に掲載したデータに基づき、1999年末までを増補し、木越のホームページで公開してきたものに、『上田秋成研究事典』（笠間書院 2016年1月）の刊行にあわせ、事典執筆者の協力を得て、2015年末までの分を増補し、形式も改めて、ここに公開するものです。
2. このデータは、自由にダウンロードして利用していただくことを想定しています。エクセル形式で、年代順（外国語文献は、言語別に年代順になっています）にしてあります。自由に並べ替えるなどして利用してください。
3. 新しく設けた分類項目や掲載頁、なお作業は半ばです。今後、時間が得られるごとに増補訂正し、新しい版をここに掲載していく予定でいます。
4. データに誤りや追加すべきものを見つけた場合は、研究会のメールアドレスまで連絡していただければ幸いです。

#####

《以下は、横山邦治監修『読本研究文献目録』（溪水社 1993年10月）掲載時に付した凡例と目録編纂の経緯を記した小文です。》

=====

上田秋成研究文献目録

稲田篤信
木越 治 編
近衛典子

凡例

一、この目録は、明治期より現在までに発表・刊行された上田秋成に関する文献を可能

な限り網羅的に収めるものである。

二、記載の形式は、

著者名 論文・著書名

収録雑誌・単行本名(刊行所) 巻号(頁数) 刊行年月

備考欄

という順序である。

備考欄の《 》内は単行本の細目や書名・論文名からは内容のわかりにくいものについての注記等であり、「→」のあとには単行本・論文集等への収録状況を記した。

三、採録したのは、秋成及びその作品に関する影印・翻刻・注釈・研究論文・エッセイ・年譜・文献目録・関連研究書・資料集及びその書評・紹介等であるが、この他にも、秋成作品の享受の様相を知るという観点から、秋成の登場する小説・戯曲・幼児向けの現代語訳・マンガ・受験参考書類等もできるだけ取り上げるようにつとめた。

なお、外国語への翻訳や外国語による研究は別項にまとめた。

四、論文・著書名欄に掲げる単行本は、秋成ないし秋成作品を書名とするもの(実質的に秋成だけを扱うものならば別の書名でも)のみに限定した。その他の単行本収録著作については、既発表論文の場合、初出誌の時点で採録し、備考欄の「→」あとに収録単行本名を記すという形式を取り、当該単行本が初出の場合は、採録部分を含む章・節を論文名欄に掲げるという形式を取った。なお、備考欄に二度以上出る単行本の発行年・発行所は最初に出る箇所のみ記し以後は省略した。巻末にそれらの一覧を掲げたので利用されたい。

五、可能な限り現物にあたって確認するように努め、当該著作の頁数を示した。

付記

本目録作成にあたっては、先行の秋成文献目録及び『国文学年鑑』各年度版等を利用させていただきました。

また、調査・作成の過程で資料の提供・訂正箇所の報告等で御協力いただいた、

森山重雄・松井静夫・丸山泰・森田喜郎・太刀川清・小椋嶺一・高木元・高橋明彦

・出口逸平・深沢秋男・青木稔弥・岡島昭浩・元田與市・鈴木圭一・鈴木よね子

の諸氏に心より感謝いたします。



縁起のようなもの

—上田秋成研究文献目録について—

木越 治

いま、私の手元に茶色く変色しすり切れたガリ版刷りのワラ半紙が五枚ある。「上田秋成研究参考文献」と題されたこのプリントは大学三年生の時の国文学特殊講義（担当は当時金沢大学にいらっしやった小池正胤先生である）で上田秋成がとりあげられた時、参考文献一覧を誰か作らないかと言われ、志願して作ったものである。昭和44～45年頃のことであった。本目録に収録された「上田秋成研究文献目録」の編者のひとりとしてなにか書くように言われた時、まず思い出したのがこの目録で、私の秋成文献目録へのこだわりももう四半世紀にわたることを確認して感慨をあらたにしたことであった。

この古いプリントを見ると、まずは『角川版古典鑑賞講座・秋成』や雑誌『国文学』の秋成特集に載る目録を写すことから始めている。まとまった目録としてはこの程度しかなかったからなのだろうが、いずれも昭和33～34年頃のものなので当時としても古い情報しか載っていない。以後の分はまだ数冊しか出ていなかった『国語国文学研究文献目録』や雑誌の学会展望、あるいは『国語と国文学』巻末の雑誌要目などで補うなどしてあとの方に補遺としてくっつけてある。しかも、どうやらその後も増補を試みるつもりだったらしく、あちこちに書き込みがあり、ペン書きのメモも数枚残っている……。

しかし、この目録を作ったしばらくあとに刊行された角川版『雨月物語評釈』の巻末にはとても詳細な文献目録が附されており、やはりその頃に出た大場俊助著『秋成のテンカン症とデーモン』巻末の「上田秋成研究文献」（佐野正巳編）も相当にくわしいものだったので、両者をあわせればたいいの用は足りた。だから、私の目録の寿命は一年もなかったことになるが、そういうことよりも、私はこういう作業を通して、明治以来の秋成研究の歴史を身をもって知ると同時に、各論文に引用されている先行論文の状況から、それぞれの時点での研究の中心がどのあたりにあったのか、ということをもおのずから学んでいたように思う。別に意識していたわけではないが、これはかなりオーソドックスな国文学入門法ではなかったかと今にして思うのである。

ところで、こういう目録類はおおむね編年体であり、かつ雑誌と単行本は区別してあるのが普通である。しかし、使っているうちにこういう形式は必ずしも便利とはいえないのではないかと思うようになった。同じ単行本であっても秋成を専門に取り上げるものとそうでないものとは区別すべきだろうし、なによりも雑誌掲載のものと単行本収録論文との関係が明記されていないと実際の利用に際してとても不便である。目録で名前だけ知っていた書物をたまたま図書館で見つけ喜んで開いて見たところ雑誌ですでに読んだことがあるものだったという経験は一度や二度ではなかった。（目録作成者の立場からさらに付け加えておけば、単行本収録にあたってはぜひとも初出誌を明記してほしいと思う。専門の研究書でそういう点がいいかげんなのはたいい内容もイマイチだから余計に腹が立つ……）。

そういう経験をもとに、大学に勤めてしばらくたってから著者別の目録を作り始めた。著者・論文名・発表年月・単行本収録状況・自分の手元にあるか否か、あるとすればどういう形式か（雑誌・コピー・抜刷な

ど)等をまとめたもので、最初は原稿用紙に書いていたがやがてカードに切り替えた。ある程度研究状況がわかってくると、読む必要のある論文か否かは著者でだいたい見当がつくようになるし、好きな研究者、気になる人の研究は、断簡零墨でも読みたいと思うようになるもので、そんな欲求を満たすものとして作り始めたのである。個人的な備忘録ではあるが、将来的にはなんらかのかたちで発表したいと考えていたので、学生時代とは違って孫引きですますようなことはせず、できるだけ現物を確認し可能な限りコピーを集めるようにした。カードにして千枚近くあったと思うが、抜刷や論文のコピーなども著者別に整理するようにしたので、これはかなり長期間にわたって便利に使うことができた。ただ、一、二年もほおっておくと末記載のものがたくさんたまっていく(コピー・抜刷も同様)ので、休みなどにえいやっと思いついて整理しなければならないのが結構面倒ではあった(これはいまでもそんなに変わっていない)。桜楓社版『春雨物語 付春雨草紙』(浅野三平編)巻末の『『春雨物語』参考文献目録』はこのカード目録を生かした一例であるが、このときは長島弘明氏との共同作業だったので、これを機に双方の手元にあるデータを照合しあうというようなこともした。

ともあれ、こういう経験を通して文献目録のあるべき形式ということに関しては自分なりに考えが固まっていたのであるが、ちょうどそんな頃『読本研究』誌創刊の件が持ち上がり、横山先生より相談を受けた際、私は「文献目録を定期的に載せる欄を設けてほしい、秋成に関しては私が責任を持ってもよい」というようなことを申し上げたのである。そしてそれはただちに採用され、言い出しっぺの責任というような感じで第二号から連載を始めることになったのである。

ただ、この目録を連載するにあたっては、これまでの試行錯誤の結果を生かすべく自分なりにいくつかの目論見を持っていた。それらを思いつくままに列挙してみる。

(1) 共同でやる。

ひとりでやることに限界があることは長島氏とデータの照合をしたときに痛感したので、すでに秋成の文献目録を何度か作成した経験のある稲田篤信氏(当時富山大学助教授)と東京在住の近衛典子氏(当時お茶の水女子大学助手)に共編をお願いした。隣組だった稲田氏とは毎週のように会えたので、問題点があればいつでも相談することができたし、また、金沢や富山で調べ切れないものについては東京にいることの利点を生かして近衛氏に調査を依頼することができたので、私の負担は非常に軽減された。その分、近衛氏には最初の段階で特に大きな負担をかけることになったのだが……。なお、データの管理は私のところで一元的に行ったが、図書館まわりの大変さにくらべればなにほどのことでもない。

(2) 完全版をめざす。

せっかく作るのだし、スペースの制限もない連載形式だったので、これまでの目録に掲載された分をすべて吸収することは当然として、それらに不完全な形でしか収録されていない文献などもつとめて収集を心がけるようにした。その結果、稲田氏経由で、昭和30年代前半の日本文学協会周辺の活動資料がいろいろ集

まってきた。これらのなかでは「秋成研究のしおり〈1956年版〉」がもっとも貴重だと思う。私も森田喜郎氏の御好意で「秋成研究会会報」（重友毅氏のもとで行われていた研究会の機関誌）や「秋成」（京都の愛好家による研究会の機関誌）のバックナンバーを見ることができたが、前者の執筆陣たるや、中村幸彦氏をはじめ、丸山季夫・水野稔・鶴月洋・高田衛・中野三敏・中村博保等の諸氏が毎号並ぶというまことに豪華なもので、これを完全な形で収録したことだけでも今回の目録編纂の意義はあったと思ったほどである。この他、作家の井伏鱒二に『雨月物語』明治翻刻本』という、酒田在住の秋成研究家佐藤古夢について述べた文章があることを知ったのも目録作成者ならではの収穫であった。

ただ、これは文献目録一般に言えることだが、掲載すべきデータの90%は誰がやっても同じようなものが集まるにちがいないと思われる。作成者の個性は残りの10%に集中的に出ることになり、作成者としてはこの部分にいちばんこだわりかつまた苦勞するのである。しかし大部分の利用者からすればこの10%は読まないでもすむものがほとんどである。作成者としてはどんな短いものでももれなく正確に載せようと思ってあれこれ苦勞するのだが、一方でそれは結局のところ自己満足にすぎないのではないか、という思いはいつもある。ただ、英文学専攻の同僚から、よい目録・よい索引を作ろうとする情熱は結局対象への愛情に根ざしているのだ、というふうにはげまされて以来、集めたデータのうちひとつでも利用者が「へえ、こんなのがあったのか」と感心してもらえば作成者としては以って冥すべしだ、と覚悟を決めるようになった。

とはいえ、単行本への収録状況などもできるだけ丁寧に記すよう心掛けた結果として、石川淳の「新釈雨月物語」や円地文子の「二世の縁拾遺」のように個人全集や文学全集・単行本・文庫本などさまざまな形態で出ているものについてえんえんと書きつらねていかねばならないのはかなりむなしい作業であるし、また、作成者の価値判断は持ち込まないことにしているとはいえ、すぐれた論文と題名だけで中味も結論も想像できてしまうようないわゆる「感想文」を同じ形式で記述して行かなければならないのは気持ちの上でかなりひっかかりを感じたりもするのだが、このあたりは目録作成につきまとう宿命とあきらめるしかないのだろう。

また、当初は「研究文献」ということにこだわり、文学史・文学辞典類は省くと凡例にも明記していたが、後には文学辞典はともかく文学史の類は採録する方針に切り替えた。全体として、作業をはじめた当初は割合禁欲的に取捨選択していたが、だんだんとマニアックになり、それにつれて採録対象も広がっていったようである。結果的に、小説・エッセイはもちろんのこと、受験参考書や児童向けの現代語訳・コミックさらにはコンピュータゲームまでも気付く限りは採録することになった。

しかし、日刊新聞の無署名記事・教科書・テレビ番組（最近の例では「マンガ雨月物語」というのがあった）・外国語訳などは、諸般の事情で採録を見送ってしまった。いま思うと、不完全な形であれ取り上げておけばあとで増補する機会もあったらと思うので、いささか心のこりである。共編者の稲田氏がいつだったか（たぶん半分はあきれながらであろうけれど）「研究文献目録の域を超えて秋成享受史年表ともいべき性格を持つようになった」と評してくれたことがあったが、その批評に答えるためにも、今回は省いてしまったこれらのデータをいずれは生かすようにしたいと思っている。

(3) データの作成はすべてコンピュータで行う。

もともと、カード形式で作っていたデータだから、これは作業の大前提であったといえる。カードでは記入する情報量に限りがあったのに対し、コンピュータだと無限（当初はカード型データベースソフトを使っていたのでそうでもなかったが、現在のように CSV 形式と呼ばれるカンマ区切りのテキストファイルに書き込むようにしてからは、可変長だの固定長だのという議論は不要になった）なので、その特性を生かして、自由に注記のできる備考欄を設け、題名だけではわかりにくいもろもろ情報を書き込むようにした。単行本も細かく目次を書き込むようにしたので、題名とこの欄を活用すれば主題別の内容検索もかなりの確率で可能なはずである。この種の検索にはよくキーワードを与える方法が採られるが、大量かつ広範囲のものならいざ知らず、この程度の分量だと収集段階で簡単なメモ形式で記入していき、それを利用して検索して行くというのがいちばん効率的だと思う。

また、当初は活字で発表することを第一義的に考えていたのだが、最近はコンピュータで利用する電子版の方がこの目録の本来の形式であると思うようになりつつある。だから、年に一度のことではあるが雑誌掲載のためにいちいちフォーマットを整え、印刷上の指示を書き込んで送る作業が少々苦痛になってきている（それでいつも横山先生や大高氏には迷惑をかけている）。というのも、この種のデータは絶対的にコンピュータで検索する方が便利だからである。前に編年体はあまり便利ではないと書いたが、コンピュータを利用するようになると、もとのデータがどんな順序で並んでいようが関係なくなってくる。必要に応じて年代別・著者別・掲載誌別等任意の形式で取り出せるからである。数年前後輩の秋成研究者の一人から「この目録を使いたいのでコンピュータを覚えることにしました」と言われて非常にうれしかったことを覚えているが、手前味噌でなくその程度の価値はあるデータだと思っている。

しかし、書物版ではその特色が十分に発揮できないのではないかと思う。実は、本書にデータの入ったフロッピーディスクを添付することを提案したのだが、まだ時期尚早であつたらしく実現には至らなかったので、興味のある方は木越まで連絡して下さるようお願いしておく。本書の他のデータとともに送料と DISK 代金のみでいつでもお頒けする用意がある。データは MS-DOS 標準テキストファイルになっているが、連絡に際しては、使用機種・DISK のメディア(3.5 インチ、5 インチの別等)・フォーマットの形式(2HD・2DD など)等をお知らせ下さるとありがたい。なお、「情報処理語学文学研究会」の「テキストアーカイブ」や PC-VAN の SIG「オリエン特」にも登録してあるので、そちらからも入手することも可能なはずである。

(4) まとめ

いずれにしても、こういう目録づくりは終わりのない作業であり、不断に増補・訂正されて行くところにこそ存在意義があるのといえる。が、そのことは、作成者の立場からすればいささか気が重いことでもある。しかし、自分なりのこだわりもあるので『読本研究』誌が続く限りはおりるわけにはいかないという気持ちでいる。その意味では今回の合冊版もひとつの区切りでしかないであろう。

今後とも、読者諸賢にはデータ提供その他で協力をお願いしたいと切に願う次第である。

(一九九三年三月二十二日記す)